表 12　世帯収入十分位と行為と仲間関係の調査項目との関係

〔問題行動〕

	約束を守らない・うそをつく		子どもが言うことを聞かない		他の子ども達とよくケンカをする	
	第7回	第10回	第7回	第10回	第7回	第10回
	(1年生)	(4年生)	(1年生)	(4年生)	(1年生)	(4年生)
第1十分位	12.8%	20.6%	14.7%	19.0%	1.9%	3.2%
第2十分位	11.0%	16.1%	14.0%	15.1%	1.8%	2.4%
第3十分位	11.5%	13.9%	13.2%	16.5%	1.9%	1.9%
第4十分位	9.6%	15.0%	12.7%	14.7%	1.7%	1.8%
第5十分位	9.6%	13.4%	12.7%	14.6%	1.5%	2.2%
第6十分位	9.3%	13.9%	12.4%	13.9%	1.7%	1.5%
第7十分位	8.9%	13.7%	12.2%	13.8%	1.7%	2.4%
第8十分位	8.2%	12.6%	12.2%	12.8%	1.4%	1.8%
第9十分位	7.4%	12.6%	12.5%	13.7%	1.7%	1.9%
第10十分位	7.4%	11.1%	11.1%	12.8%	1.7%	1.9%
合計	9.6%	14.3%	12.8%	14.7%	1.7%	2.1%
N	33,079	20,386	33,079	20,386	33,079	20,386

〔仲間関係〕

	友だちと遊ばない・遊べない		いじめる・いじめられる	
	第7回	第10回	第7回	第10回
	(1年生)	(4年生)	(1年生)	(4年生)
第1十分位	2.4%	4.5%	2.5%	3.9%
第2十分位	2.4%	3.0%	2.6%	3.0%
第3十分位	2.3%	3.2%	2.8%	2.6%
第4十分位	2.5%	2.9%	1.8%	2.9%
第5十分位	2.4%	3.3%	2.1%	2.8%
第6十分位	2.1%	2.5%	2.3%	2.9%
第7十分位	2.8%	3.2%	2.3%	3.0%
第8十分位	2.2%	2.8%	2.0%	2.2%
第9十分位	2.5%	3.3%	2.4%	2.7%
第10十分位	2.2%	2.4%	1.8%	2.3%
合計	2.4%	3.1%	2.3%	2.8%
N	33,079	20,386	33,079	20,386

(5)【分析 4～6】親資源論に基づく親の価値観分析

本項では、階層ごとに異なる価値観が養育の質に影響を及ぼすとすることを見るために、Kohn（1969）とほぼ同じ調査項目がある「どのような子どもに育ってほしいか」、「悪いことをしたときの親の対応」について分析する。さらに階層ごとに異なる Bourdieu が提唱したハビトュスを検証するために、親子の食生活について分析することとする。

①【分析 4】どのような子どもに育ってほしいか

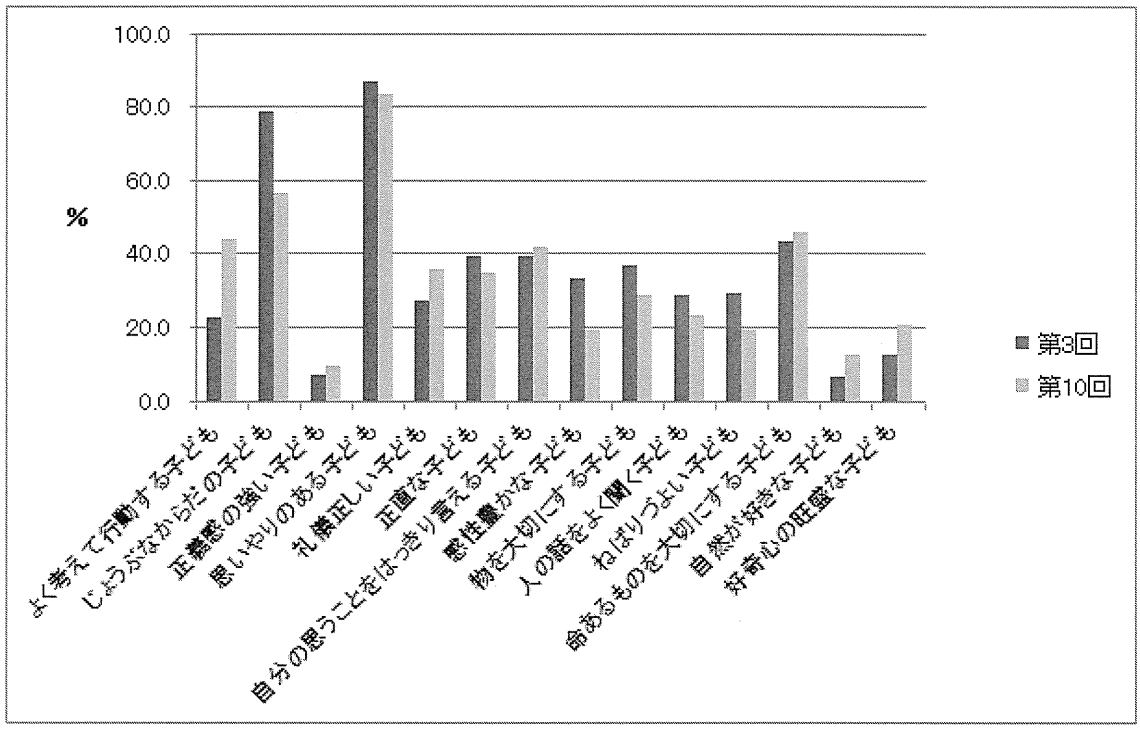
ここでは、親資源論に基づく以下の仮説を検証する。

仮説 4：親の学歴や就業形態などの階層によって、親が子どもに期待する性質は異なっており、高い階層世帯の親は子どもの自己指令性や自己規律、好奇心を重んじるのに対し、低

所得層の親は同調性を重んじる。

図２は、調査項目のある、第３回と第 10 回の両方に回答した人に限定して、子どもの年齢と重視する項目（上位５つまで）の変化をあらわしている。

図２　調査回別　どのような子どもに育ってほしいか（上位５つを選択）



いずれの調査年も「思いやりのある子ども」がもっとも高い割合となっているが、調査年による変動が大きいものは、左から順に、「よく考えて行動する子ども」は第 10 回（10 歳）の方が高く、逆に「じょうぶなからだの子ども」は低くなっている。親は子どもが幼いうちは、まず健康を重視していたが、小学校４年生になると、より内面性を重んじるように親の考え方が変化してきていることがわかる。Kohn(1969) で階層の高い親が志向するとした、「好奇心の旺盛な子ども」も、第３回よりも第 10 回になって割合が上昇している。一方、「感性豊かな子ども」、「物を大切にする子ども」は、逆に減少している。

Kohn (1969) は 10 歳から 11 歳の子どもをもつ父母を対象としているため、本研究でも、子どもの年齢がほぼ同じになる、第 10 回（10 歳）の調査結果を用いて、親の階層によって子ども観が異なるかについて、分析する。

表 13 は、父母の就業形態別の「どのような子どもに育ってほしいか」の分布をみている。就業形態にかかわらず、「思いやりのある子ども」が高い割合を示している。

表 13　父母の就業形態別　どのような子どもに育ってほしいか

（父の職業）

	家事（専業）	無職	学生	勤め（常勤）	勤め（パート・アルバイト）	自営業・家業	その他	合計
よく考えて行動する子ども	43.4%	39.7%	42.9%	44.7%	46.6%	42.5%	45.0%	44.4%
じょうぶなからだの子ども	75.5%	55.2%	42.9%	57.3%	54.8%	58.8%	54.3%	57.5%
正義感の強い子ども	5.7%	9.4%	14.3%	9.0%	9.7%	10.1%	10.9%	9.2%
思いやりのある子ども	83.0%	77.6%	100.0%	84.3%	78.9%	83.1%	81.4%	84.0%
礼儀正しい子ども	34.0%	37.2%	28.6%	35.9%	30.2%	37.4%	30.2%	36.0%
正直な子ども	35.8%	37.9%	71.4%	34.7%	33.7%	35.3%	31.8%	34.8%
自分の思うことをはっきり言える子ども	35.8%	43.0%	28.6%	42.2%	43.4%	41.5%	38.8%	42.1%
感性豊かな子ども	22.6%	17.0%	28.6%	18.9%	22.0%	21.3%	27.1%	19.3%
物を大切にする子ども	22.6%	35.0%	14.3%	28.2%	30.2%	29.3%	26.4%	28.4%
人の話をよく聞く子ども	15.1%	31.8%	0.0%	28.7%	30.8%	27.9%	35.7%	28.6%
ねばりづよい子ども	26.4%	26.0%	42.9%	30.2%	28.2%	28.3%	30.2%	29.8%
命あるものを大切にする子ども	26.4%	48.4%	42.9%	43.2%	42.2%	43.0%	46.5%	43.2%
自然が好きな子ども	5.7%	7.9%	0.0%	6.1%	7.9%	6.9%	6.2%	6.2%
好奇心の旺盛な子ども	18.9%	11.2%	14.3%	12.6%	14.1%	12.9%	13.2%	12.7%

（母の職業）

	家事（専業）	無職	学生	勤め（常勤）	勤め（パート・アルバイト）	自営業・家業	内職	その他	合計
よく考えて行動する子ども	44.9%	44.8%	39.3%	46.1%	42.9%	42.7%	44.5%	42.1%	44.2%
じょうぶなからだの子ども	59.6%	60.4%	48.2%	54.9%	55.6%	59.5%	56.7%	53.2%	57.0%
正義感の強い子ども	8.6%	9.3%	12.5%	9.6%	9.3%	9.8%	6.9%	11.5%	9.2%
思いやりのある子ども	84.6%	81.7%	80.4%	83.8%	84.7%	82.1%	85.1%	83.7%	84.2%
礼儀正しい子ども	35.8%	34.7%	23.2%	34.1%	37.1%	37.8%	37.0%	34.5%	36.0%
正直な子ども	33.3%	33.6%	25.0%	36.2%	36.3%	34.9%	28.6%	35.7%	35.1%
自分の思うことをはっきり言える子ども	42.7%	41.6%	42.9%	41.2%	42.4%	41.1%	45.0%	36.9%	42.1%
感性豊かな子ども	18.9%	19.2%	32.1%	20.5%	18.5%	22.7%	13.9%	27.4%	19.3%
物を大切にする子ども	27.4%	28.2%	33.9%	28.5%	29.5%	28.7%	34.2%	24.6%	28.6%
人の話をよく聞く子ども	28.5%	27.9%	21.4%	28.5%	29.1%	25.6%	31.7%	29.0%	28.6%
ねばりづよい子ども	30.1%	27.9%	30.4%	29.7%	29.6%	29.9%	26.9%	25.0%	29.6%
命あるものを大切にする子ども	44.0%	41.8%	50.0%	43.2%	44.3%	41.5%	44.1%	47.6%	43.7%
自然が好きな子ども	6.4%	6.1%	10.7%	6.0%	6.0%	7.7%	6.9%	8.7%	6.3%
好奇心の旺盛な子ども	12.9%	11.6%	21.4%	13.5%	11.8%	13.9%	12.6%	14.3%	12.6%

親資源論は、子育て観の根拠を、親の仕事の自律性・複雑性に求めているため、ここでは親が常勤であるか、パート・アルバイトによって違いがあるか見ていこう。Kohn(1969)の結果では、仕事の自律性・複雑性が高い中流階層の父親は、子どもに自己指令性、自律性、好奇心を求め、労働者階級の父親は子どもの同調性を重視し、正直であること、親のいうことをきくこと、物を大切にすることを求めることになる。

日本の場合にこれがあてはまるか見ていこう。自己指令性をあらわす、「よく考えて行動する子ども」は父親が常勤の場合は、44.7%であるのに対し、パート・アルバイトの場合は46.6%、「思いやりのある子ども」は前者が 84.3%、後者が 78.9%と、就業形態による差はほとんどみられなかった。自律性をあらわす「ねばりづよい子ども」は前者が 30.2%、後者が 28.2%で、やや高い程度である。最後に好奇心に関連する「感性豊かな子ども」は 10%ポイント程度の差がついたが、「好奇心の旺盛な子ども」はわずかに父親が常勤の場合で高いにすぎなかった。反対に同調性に関する「正直な子ども」、「物を大切にする子ども」も大きな差はみられなかった。また、母親に関しても、親の就業形態による子ども観には大きな違いは見られなかった。

親の階層による子ども観の違いは、父母の最終学歴とも強い関係がある。表 14 は、父母の最終学歴別の子ども観をあらわしている。

表 14　父母の学歴別　「どのような子どもに育ってほしいか」

父の学歴別	中学校	専修・専門学校(中学校卒業後)	高校	専修・専門学校(高校卒業後)	短大・高専	大学	大学院	その他	合計
よく考えて行動する子ども	38.7	39.8	40.8	42.3	44.9	46.9	55.2	43.2	43.7
じょうぶなからだの子ども	52.8	51.4	54.5	55.9	56.1	59.4	60.4	37.8	56.5
正義感の強い子ども	10.8	11.1	9.0	9.0	6.4	9.3	10.3	2.7	9.2
思いやりのある子ども	82.9	82.7	83.1	84.3	84.4	83.7	81.1	81.1	83.3
礼儀正しい子ども	39.4	34.1	37.2	37.0	34.3	34.1	28.0	29.7	35.7
正直な子ども	38.3	41.9	36.4	34.9	36.2	32.6	29.6	32.4	34.8
自分の思うことをはっきり言える子ども	42.8	45.3	42.8	43.2	42.2	40.2	38.4	35.1	41.7
感性豊かな子ども	14.6	17.8	17.2	18.5	18.7	21.9	23.8	24.3	19.2
物を大切にする子ども	37.0	34.1	32.4	29.7	29.0	23.4	19.0	37.8	28.5
人の話をよく聞く子ども	28.2	32.5	30.1	29.1	27.2	26.4	25.2	43.2	28.4
ねばりづよい子ども	25.0	28.7	26.7	28.8	30.8	31.8	37.3	40.5	29.2
命あるものを大切にする子ども	47.5	44.1	44.8	44.1	44.6	41.0	35.1	43.2	43.2
自然が好きな子ども	6.9	10.0	6.2	6.5	5.9	5.9	6.7	5.4	6.2
好奇心の旺盛な子ども	9.4	8.1	10.8	11.4	13.2	14.6	18.5	13.5	12.5

母の学歴別	中学校	専修・専門学校(中学校卒業後)	高校	専修・専門学校(高校卒業後)	短大・高専	大学	大学院	その他	合計
よく考えて行動する子ども	38.7	39.7	40.7	43.2	45.4	49.9	61.6	31.0	43.7
じょうぶなからだの子ども	52.9	50.1	54.9	55.8	58.0	60.1	56.2	58.6	56.5
正義感の強い子ども	12.5	8.4	9.5	8.9	8.3	9.5	12.8	17.2	9.2
思いやりのある子ども	80.4	79.9	83.1	82.9	84.4	83.4	81.3	82.8	83.3
礼儀正しい子ども	36.1	36.3	38.2	35.1	35.7	30.6	22.7	41.4	35.7
正直な子ども	39.2	36.6	37.1	33.9	34.0	30.7	27.6	20.7	34.8
自分の思うことをはっきり言える子ども	42.7	44.1	42.8	42.0	42.2	37.7	37.9	37.9	41.7
感性豊かな子ども	13.5	14.6	16.4	19.4	20.0	25.3	32.0	24.1	19.2
物を大切にする子ども	40.0	33.4	32.7	29.7	25.4	19.9	11.3	20.7	28.5
人の話をよく聞く子ども	28.6	26.6	29.7	29.8	27.6	24.7	22.2	31.0	28.4
ねばりづよい子ども	21.0	24.0	26.6	28.8	31.3	34.4	38.9	44.8	29.2
命あるものを大切にする子ども	50.4	52.2	44.1	45.8	41.5	38.5	35.0	34.5	43.2
自然が好きな子ども	7.9	8.1	5.9	6.6	5.6	6.8	11.3	17.2	6.2
好奇心の旺盛な子ども	9.1	9.9	10.1	11.8	14.1	16.9	24.1	20.7	12.5

注：合計には、「学歴不詳」を含む

父母とも親の学歴が高くなるほど自己指令性の「よく考える子ども」、自律性の「ねばりづよい子ども」、好奇心に関する「感性豊かな子ども」、「好奇心の旺盛な子ども」を重視する傾向がみられる。Kohn(1969) が労働者階級の親が求める要素とした、「正直な子ども」、「物を大切にする子ども」などの項目は、高学歴者になるほど、それを重視する割合は低下する。親の階層によって子育ての価値観が異なるという結果は、親の学歴に関しては、ほぼ Kohn (1969) の結果と合致した。日本では親の就業形態よりも学歴が、子ども観に影響を与えると結果は、Kohn et al.(1990)、直井 (1989) でも確認されており、先行研究とも分析結果が合致した。

これまでは、親の職業や階層による子ども観の分析をしてきたが、経済的変数である貧困との関係をみていこう。表 15 は、貧困経験の有無によって、子ども観が異なるかをあらわした結果である。表中の数値は、「重視する」と答えた者の割合である。「重視しない」と回答した者の割合の記載は省略しているが、100%－「重視する割合」を計算すると、求められる。各項目は、Pearson のカイ二乗検定を行っている。

表 15　貧困経験の有無別　どんな子どもに育ってほしいか

	貧困経験なし	貧困経験あり	漸近有意確率
よく考えて行動する子ども	44.0%	42.3%	0.03 **
じょうぶなからだの子ども	57.0%	53.2%	0 ***
正義感の強い子ども	9.1%	10.4%	0.005 ***
思いやりのある子ども	83.6%	81.2%	0 ***
礼儀正しい子ども	35.5%	37.2%	0.025 **
正直な子ども	34.4%	37.5%	0 ***
自分の思うことをはっきり言える子ども	41.6%	42.3%	0.351
感性豊かな子ども	19.5%	17.1%	0 ***
物を大切にする子ども	27.7%	33.8%	0 ***
人の話をよく聞く子ども	28.2%	29.6%	0.048 **
ねばりづよい子ども	29.7%	26.1%	0 ***
命あるものを大切にする子ども	42.9%	45.5%	0.001 ***
自然が好きな子ども	6.1%	7.0%	0.018 **
好奇心の旺盛な子ども	12.6%	11.6%	0.048 **
標本数	29,546	4,578	

注：*:p<0.1、** :　p<0.05、*** : p <0.01

貧困経験の有無と親が「どんな子どもに育ってほしいか」と思う価値観には、「自分の思うことをはっきり言える子ども」を除き、すべての項目に貧困経験との関連性があることが分かった。階層の高い親が求めるとされる「よく考えて行動する子ども」、「思いやりのある子ども」、「感性豊かな子ども」、「ねばり強い子ども」、「好奇心の旺盛な子ども」の5項目について見ると、いずれも「貧困経験なし」の親の方が、「貧困経験あり」の親よりも高い数値となっている。逆に階層の低い親が求めるとされる「正直な子ども」、「物を大切にする子ども」は、「貧困経験なし」の親よりも、「貧困経験あり」の親の方が高い。

よって、仮説4は支持された。

②【分析5】親資源論に基づく子どもが悪いことをしたときの対応分析

次に、Kohnの親資源論に基づく子どもが悪いことをしたときの対応について、分析を行う。仮説は以下の通りである。

仮説5：階層によって親が「子どもが悪いことをしたときの対応」は異なっており、高い階層の親はできるだけ言葉で説明をするのに対し、そうでない階層の親は言葉で説明するよりも体罰をしやすい。

Kohn（1969）はさらに親の階層ごとに異なる子どもの罰の与え方を分析している。中流階級と労働者階級の母親では、子どもが悪いことをしたときの対応が異なり、物理的にたたくのは労働者階級の母親に多く、とくに女子に対してそうする傾向に階級差が出やすいと分析している。Bernsteinのコード理論でも、親が子どもに接する際に、「言葉で理由を説明するか」「だめ、いけない」、と簡単な言葉ですませるかは、階層によって異なるとし

ている。こうした傾向が日本でもみられるか、クロス集計でみていく。

表 16 は、父親の就業形態別にみた子どものしかり方について、「よくする」と回答した者の割合を示している。Kohn の調査では子どもから見た、親のしかり方も調査しているが、本調査は親の自己申告に基づく結果しかない。

表 16　子どもの性別・父親の就業形態別　子どものしかり方

		言葉でいけない理由を説明する	理由を説明しないで言葉で「だめ」「いけない」としかる	おしりをたたくなどの行為をする	子どもがしたことを無視して悪いことに気づかせる	外に出す・押し入れなどに閉じ込める	標本数
男子	家事(専業)	66.7%	38.9%	16.7%	5.6%	5.6%	18
	無職	75.7%	21.1%	14.1%	2.2%	0.5%	185
	学生	100.0%	16.7%	0.0%	8.3%	0.0%	12
	勤め(常勤)	82.2%	21.5%	11.2%	1.4%	0.7%	17273
	勤め(パート・アルバイト)	79.4%	25.4%	14.3%	3.2%	1.2%	252
	自営業・家業	81.0%	22.3%	12.2%	1.8%	0.5%	2752
	その他	80.0%	22.7%	13.3%	2.7%	0.9%	225
	合計	81.9%	21.7%	11.4%	1.5%	0.7%	20717
女子	家事(専業)	88.9%	18.5%	0.0%	7.4%	0.0%	27
	無職	82.3%	21.4%	10.9%	2.1%	1.6%	192
	学生	87.5%	12.5%	6.3%	0.0%	0.0%	16
	勤め(常勤)	82.2%	20.0%	7.7%	1.2%	0.3%	15984
	勤め(パート・アルバイト)	79.6%	22.0%	7.8%	2.0%	0.8%	245
	自営業・家業	81.3%	19.8%	9.0%	1.2%	0.5%	2444
	その他	78.0%	22.0%	7.3%	0.9%	0.0%	218
	合計	82.0%	20.0%	7.9%	1.2%	0.4%	19126
合計	家事(専業)	80.0%	26.7%	6.7%	6.7%	2.2%	45
	無職	79.0%	21.2%	12.5%	2.1%	1.1%	377
	学生	92.9%	14.3%	3.6%	3.6%	0.0%	28
	勤め(常勤)	82.2%	20.8%	9.5%	1.3%	0.5%	33257
	勤め(パート・アルバイト)	79.5%	23.7%	11.1%	2.6%	1.0%	497
	自営業・家業	81.1%	21.1%	10.7%	1.5%	0.5%	5196
	その他	79.0%	22.3%	10.4%	1.8%	0.5%	443
	合計	82.0%	20.9%	9.7%	1.4%	0.5%	39843

表 16 から、合計・父親の就業形態としかり方の関係[20]をみていこう。父親が常勤の場合は、パート・アルバイトの場合に比べ、「言葉でいけない理由を説明する」が 2.7%ポイント高く、「おしりをたたくなどの行為をする」が 1.6%ポイント低めであるが、差異は大きくはない。子どもの性別によるしかり方の違いをみると、女子に対しては、男子に比べ、全体的に「言葉でいけない理由を説明する」割合が高いが、親の就業形態による差はわずかで、「おしりをたたくなどの行為をする」の割合は男子より女子が低い傾向がある。

先にみた子ども観の違いも、親の就業形態よりも学歴による影響が大きかったことから、子どものしかり方も父母の最終学歴によって異なるのか、表 17 から検証する。

20　「よくする」、「ときどきする」、「まったくしない」の 3 つの答えのうちの「よくする」の割合である。回答者母数には、回答不詳を含む。

表 17　子どもの性別・父親の最終学歴別　子どものしかり方

		言葉でいけない理由を説明する	理由を説明しないで言葉で「だめ」「いけない」としかる	おしりをたたくなどの行為をする	子どもがしたことを無視して悪いことに気づかせる	外に出す・押し入れなどに閉じ込める	標本数
男子	中学校	76.6%	25.3%	16.5%	2.1%	0.9%	1349
	専修・専門学校（中学校卒業後）	78.5%	23.4%	12.8%	3.6%	1.8%	274
	高校	79.4%	23.0%	13.3%	1.9%	0.8%	8208
	専修・専門学校（高校卒業後）	81.5%	22.6%	11.9%	1.3%	0.7%	2661
	短大・高専	82.9%	21.7%	9.6%	1.1%	0.6%	637
	大学	85.3%	19.1%	8.9%	0.9%	0.6%	6957
	大学院	88.3%	19.0%	6.2%	1.6%	0.5%	746
	その他	71.4%	39.3%	3.6%	3.6%	0.0%	28
	不詳	77.6%	23.1%	12.8%	2.5%	0.9%	321
	合計	81.8%	21.7%	11.5%	1.5%	0.8%	21181
女子	中学校	76.9%	22.7%	12.0%	2.0%	0.6%	1203
	専修・専門学校（中学校卒業後）	74.8%	21.4%	13.4%	1.9%	0.4%	262
	高校	79.6%	21.5%	9.0%	1.6%	0.3%	7576
	専修・専門学校（高校卒業後）	81.2%	20.5%	8.6%	0.9%	0.3%	2420
	短大・高専	83.0%	23.9%	8.6%	1.3%	0.2%	628
	大学	85.8%	17.8%	5.8%	0.9%	0.4%	6509
	大学院	87.8%	16.8%	3.7%	0.3%	0.6%	683
	その他	80.0%	45.0%	5.0%	0.0%	0.0%	20
	不詳	73.9%	21.1%	11.7%	2.3%	0.3%	299
	合計	81.9%	20.1%	8.0%	1.3%	0.4%	19600
合計	中学校	76.8%	24.1%	14.3%	2.0%	0.7%	2552
	専修・専門学校（中学校卒業後）	76.7%	22.4%	13.1%	2.8%	1.1%	536
	高校	79.5%	22.3%	11.2%	1.8%	0.6%	15784
	専修・専門学校（高校卒業後）	81.4%	21.6%	10.3%	1.1%	0.5%	5081
	短大・高専	82.9%	22.8%	9.1%	1.2%	0.4%	1265
	大学	85.5%	18.4%	7.4%	0.9%	0.5%	13466
	大学院	88.1%	18.0%	5.0%	1.0%	0.6%	1429
	その他	75.0%	41.7%	4.2%	2.1%	0.0%	48
	不詳	75.8%	22.1%	12.3%	2.4%	0.6%	620
	合計	81.8%	20.9%	9.8%	1.4%	0.6%	40781

表 17 は、子どもの性別・父親の最終学歴別の子どものしかり方をあらわしている。父親の就業形態に比べると、よりしかり方の差が際立つ。父親が高学歴な家庭ほど、「言葉でいけない理由を説明する」の割合が高くなり、物理的に「おしりをたたく」というしかり方は少なくなる。また、「理由を説明しないで言葉で「だめ」、「いけない」としかる」については、中学校卒業から短大・高専卒業の親の数値と、大学、大学院卒の親の数値で、乖離がでる傾向があり、「大卒以上」の学歴があるかどうかで親の対応が異なっていることが分かる。このクロス表による分析でも、先行研究と同様、親の階層によって子どもへの接し方が異なるということが明らかとなった。

次に、表 18 から、母親の最終学歴別の子どものしかり方を見ていこう。直井（1989b）では母親の学歴が高くなるほど、子どもへの接し方がより論理的になるとしているが、本研究でも母親の学歴が高くなるほど、「言葉でいけない理由を説明する」の割合が高くなり、

「理由を説明しないで言葉で「だめ」、「いけない」としかる」、「おしりをたたく」というしかり方は少なくなる。全体で比較すると、中学校卒の母親（72.8%）と大学卒の母親（88.5%）では 15%ポイント程度の差がある。「おしりをたたく」という行為では、中学校卒の母親（14.2%）と大学卒の母親（5.9%）と２倍以上の差が開いた。

表 18　子どもの性別・母の最終学歴別　子どものしかり方

		言葉でいけない理由を説明する	理由を説明しないで言葉で「だめ」「いけない」としかる	おしりをたたくなどの行為をする	子どもがしたことを無視して悪いことに気づかせる	外に出す・押し入れなどに閉じ込める	標本数
男子	中学校	72.8%	26.2%	15.7%	4.6%	1.6%	757
	専修・専門学校（中学校卒業後）	76.6%	23.4%	16.8%	1.2%	1.2%	244
	高校	77.6%	23.8%	13.5%	1.8%	0.9%	8099
	専修・専門学校（高校卒業後）	83.2%	21.1%	11.9%	1.2%	0.7%	3887
	短大・高専	85.6%	19.8%	9.7%	1.2%	0.5%	5109
	大学	87.8%	18.6%	6.7%	0.9%	0.6%	2819
	大学院	90.4%	11.3%	6.1%	0.9%	0.0%	115
	その他	80.0%	25.0%	0.0%	5.0%	0.0%	20
	不詳	78.6%	22.9%	13.7%	1.5%	2.3%	131
	合計	81.8%	21.7%	11.5%	1.5%	0.8%	21181
女子	中学校	76.1%	22.3%	12.5%	2.6%	0.3%	703
	専修・専門学校（中学校卒業後）	79.0%	18.7%	11.2%	3.7%	1.1%	267
	高校	77.5%	22.3%	9.9%	1.5%	0.4%	7598
	専修・専門学校（高校卒業後）	83.3%	19.5%	7.5%	1.2%	0.3%	3442
	短大・高専	84.7%	18.4%	6.2%	0.9%	0.2%	4632
	大学	89.2%	18.1%	5.0%	0.9%	0.3%	2729
	大学院	93.0%	8.7%	0.9%	0.9%	0.9%	115
	その他	90.0%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%	20
	不詳	74.5%	18.1%	11.7%	1.1%	1.1%	94
	合計	81.9%	20.1%	8.0%	1.3%	0.4%	19600
合計	中学校	74.4%	24.3%	14.2%	3.6%	1.0%	1460
	専修・専門学校（中学校卒業後）	77.9%	20.9%	13.9%	2.5%	1.2%	511
	高校	77.5%	23.1%	11.8%	1.7%	0.7%	15697
	専修・専門学校（高校卒業後）	83.2%	20.3%	9.8%	1.2%	0.5%	7329
	短大・高専	85.2%	19.1%	8.0%	1.1%	0.3%	9741
	大学	88.5%	18.3%	5.9%	0.9%	0.5%	5548
	大学院	91.7%	10.0%	3.5%	0.9%	0.4%	230
	その他	85.0%	17.5%	5.0%	2.5%	0.0%	40
	不詳	76.9%	20.9%	12.9%	1.3%	1.8%	225
	合計	81.8%	20.9%	9.8%	1.4%	0.6%	40781

Bernstein が重視した、「理由を説明しないで言葉で「だめ」「いけない」と言う」についても、全体でみると、中学校卒の母親（24.3%）、大卒の母親（18.3%）の差が生じている。また、子どもの性別にみると、母親の学歴にかかわらず、女子よりも男子に物理的に「たたく」しかり方がされ、女子の方が「言葉で説明する」しかり方がなされていることが分かる。

こうした母親の学歴によって、子どもの接し方が異なるという結果は、先行研究の傾向と合致した。

最後に所得階層による差をみるために、貧困であるか否かによって、子どものしかり方に差が生じるか、表 19 からみていこう。

表 19　子どもの性別・貧困状態別の子どものしかり方

		言葉でいけない理由を説明する	理由を説明しないで言葉で「だめ」「いけない」としかる	おしりをたたくなどの行為をする	子どもがしたことを無視して悪いことに気づかせる	外に出す・押し入れなどに閉じ込める	標本数
男子	貧困ではない	83.0%	21.3%	11.0%	1.2%	0.6%	14,279
	貧困	77.1%	22.8%	13.6%	2.9%	1.2%	1,198
	合計	82.6%	21.4%	11.2%	1.4%	0.6%	15,477
女子	貧困ではない	83.2%	19.8%	7.5%	1.2%	0.4%	13,261
	貧困	76.7%	23.8%	11.1%	1.8%	0.4%	1,050
	合計	82.7%	20.1%	7.8%	1.2%	0.4%	14,311
合計	貧困ではない	83.1%	20.6%	9.3%	1.2%	0.5%	27,540
	貧困	76.9%	23.3%	12.5%	2.4%	0.8%	2,248
	合計	82.7%	20.8%	9.6%	1.3%	0.5%	29,788

これまでの分析から予測されるように、非貧困家庭と貧困家庭の子育て方法は異なっており、「言葉でいけない理由を説明する」(「合計」の非貧困家庭の 83.1%、貧困家庭 76.9%。以下同じ)「理由を説明しないで言葉でだめ、いけないとする」(20.6%、23.3%)、「おしりをたたくなどの行為をする」(9.3%、12.5%)、「子どもがしたことを無視して悪いことに気づかせる」(1.2%、2.4%)、「外に出す、押し入れなどに閉じ込める」(0.5%、0.8%) と差異がある。先行研究と同様、経済的な階層によっても、子どものしかり方という側面での子育ての質には、明確な差が見られることが明らかとなった。

よって、仮説 5 は支持された。

③【分析 6】朝食の取り方と食生活

次に、階層によって無意識に身についた価値観、ハビドュスを、食生活と朝食習慣に焦点をあてて、分析を行う。検証する仮説は以下の通りである。

仮説 6：階層によって親の食生活（栄養・朝食摂取）は異なっており、高い階層の親は、そうでない階層の親よりも子どもの食生活に気を配り、子どもは朝食を毎朝きちんととる習慣が身についている。

表 20 は、貧困世帯か否か、父母の朝食の摂取状況別にみた子どもの朝食摂取状況を示している。

表 20　貧困か否か、父母の朝食摂取別　子どもの朝食摂取状況

	父母の朝食習慣		父親の朝食習慣との関連				母親の朝食習慣との関連			
			子どもの朝食			合計	子どもの朝食			合計
			食べる	食べない	不詳		食べる	食べない	不詳	
非貧困世帯	食べる	度数	10,114	45	12	10,171	12,551	58	15	12,624
		%	99.4%	0.4%	0.1%	100.0%	99.4%	0.5%	0.1%	100.0%
	食べない	度数	3,074	40	3	3,117	1,090	36	0	1,126
		%	98.6%	1.3%	0.1%	100.0%	96.8%	3.2%	0.0%	100.0%
	不詳	度数	167	2	0	169	110	0	0	110
		%	98.8%	1.2%	0.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	合計	度数	13,355	87	15	13,457	13,751	94	15	13,860
		%	99.20%	0.60%	0.10%	100.00%	99.2%	0.7%	0.1%	100.0%
貧困世帯	食べる	度数	459	5	0	464	957	16	2	975
		%	98.9%	1.1%	0.0%	100.0%	98.2%	1.6%	0.2%	100.0%
	食べない	度数	214	15	1	230	150	19	0	169
		%	93.0%	6.5%	0.4%	100.0%	88.8%	11.2%	0.0%	100.0%
	不詳	度数	16	1	0	17	18	1	0	19
		%	94.1%	5.9%	0.0%	100.0%	94.7%	5.3%	0.0%	100.0%
	合計	度数	689	21	1	711	1,125	36	2	1,163
		%	96.9%	3.0%	0.1%	100.0%	96.7%	3.1%	0.2%	100.0%
合計	食べる	度数	10,573	50	12	10,635	13,508	74	17	13,599
		%	99.4%	0.5%	0.1%	100.0%	99.3%	0.5%	0.1%	100.0%
	食べない	度数	3,288	55	4	3,347	1,240	55	0	1,295
		%	98.2%	1.6%	0.1%	100.0%	95.8%	4.2%	0.0%	100.0%
	不詳	度数	183	3	0	186	128	1	0	129
		%	98.4%	1.6%	0.0%	100.0%	99.2%	0.8%	0.0%	100.0%
	合計	度数	14,044	108	16	14,168	14,876	130	17	15,023
		%	99.1%	0.8%	0.1%	100.0%	99.0%	0.9%	0.1%	100.0%

合計から、父母が朝食を食べるか否かと、子どもが朝食を食べるか否かをみよう。父親の場合、父親が朝食を食べている場合、子どもが朝食を食べない割合は 0.5%であるが、父親が食べていない場合は 1.6%に上昇する。母親でも同様であり、母親が「朝食をとらない」場合、「子どもも朝食をとらない」は 4.2%で、母子の食生活の相関の方が強い傾向にある。しかし、その連鎖は 10%には及ばない数値であり、親の朝食摂取の状況が、子どもが朝食を食べない決定的な要因とは言いきれない。

ただし、これを貧困家庭とそうでない家庭で比較すると、貧困世帯では父母そのものの朝食をとらない者が多い。貧困世帯の場合、父親が朝食を食べない世帯では子どもの 6.5%、母親が食べない世帯で子どもの 11.2%が朝食を食べない。貧困世帯の朝食摂取習慣の連鎖は、非貧困世帯よりも大きい。

さらに、表 21 から、Bourdieu の文化資本仮説にならって、食事の栄養面にどの程度気を配っているかについて、貧困世帯、非貧困世帯別にみていこう。

すべての食生活に関する項目について、貧困家庭か否かかのクロス集計表を作成し、独立性の検定を行っている。＊がついている項目は、すべて貧困家庭か否かと父母の食生活に強い関連性があることが統計的に明らかになったことを表している。

表 21　貧困世帯か否かと父母の食生活（第９回調査）

	1日3回の食事をとるようにしている		夜食や間食をすることが多い		朝食はとるようにしている		食事は決まった時間にとるようにしている	
	父***	母***	父***	母*	父***	母***	父**	母***
非貧困世帯	76.6%	89.5%	37.8%	29.3%	75.6%	91.1%	59.3%	85.3%
貧困世帯	66.0%	78.8%	42.1%	27.9%	65.3%	83.8%	58.4%	77.6%
合計	76.1%	88.7%	38.0%	29.2%	75.1%	90.5%	59.3%	84.7%
	いろいろな種類の食品を食べるようにしている		塩分のとり過ぎに気をつけている		糖分のとり過ぎに気をつけている		カロリーのとり過ぎに気をつけている	
	父***	母***	父***	母**	父***	母**	父***	母***
非貧困世帯	76.3%	88.4%	51.7%	66.3%	55.0%	66.8%	55.4%	72.6%
貧困世帯	66.2%	79.0%	48.2%	63.5%	51.9%	65.1%	48.1%	66.9%
合計	75.8%	87.6%	51.5%	66.1%	54.8%	66.7%	55.0%	72.2%

注：「はい」と答えた割合を掲載している。
：*は Pearson のカイ二乗検定の結果、「貧困ではない」と「貧困」で父母の食生活に関する独立性の検定をした結果、独立性が棄却され、有意な関係性があることが明らかとなったことをあらわす。
*:p<0.1、** :　p<0.05、*** : p <0.01

全体的に、貧困世帯より非貧困世帯の親の方が、父母ともに、より健康的な食生活を志向していることが分かる。この結果は、小林（2010）の結果とも合致する。親の食生活の志向は、当然子どもの食生活にも当然影響を及ぼすと考えられるが、本調査では子どもについては、父母と同じ調査項目がないため、この点については検証ができない。
よって、仮説 6 は支持された。

6.　【分析 7】共分散構造分析

(1)分析の枠組み

最後に、共分散構造分析を用いて、より複雑なモデルの検証を行う。

これまでの分析から、子育て費用、家庭内文化資本、養育の質は、子どもの人的資本形成に影響を与えていることは明らかとなった。その具体的な経路や影響の大小を、共分散構造分析によって分析する。分析対象は、稼得能力がある成人にもっとも近い年齢である、調査最終回の第 10 回（４年生）の時点の子どもの人的資本（学業、社会性、健康）への経路を対象とした。

扱う標本は、以下のように制限した。貧困経験の定義の厳密化、また祖父母等の同居家族による養育の質への影響を排除するために、分析対象は父または母、そして子どものみで構成される核家族世帯のみとした。分析対象は、父母と子どものみの世帯、母親と子どものみの世帯、父親と子どものみの世帯となる。父親の影響をみる場合には、父母と子どものみの世帯、父親と子どものみの世帯に限定し、母親の影響をみる場合には、父母と子どものみの世帯、母親と子どものみの世帯に限定している。

子どもの性別によって、パスの影響が異なる可能性も考えられるため、分析は男女計、男子のみ、女子のみの 3 種類行った。その結果、分析のパターンは、「父母の常勤ダミーも

しくは教育程度」（計 4 種類）×男女計、男子のみ、女子のみ（計 3 種類）の合計 12 種類となった。

(2) モデル図と仮説の説明

図 3 は、分析に使用するモデル図である。

以下、仮説の説明と、分析に用いるパスの経路について、説明する。

① 仮説 7-1：親の階層が高い家庭の子どもは、そうでない家庭の子どもに比べて、貧困を経験する割合が低い。

人的資本理論検証のため、「父母の階層ダミー」から「子ども時代の貧困経験」につながるパスを分析する。親の階層が高い（常勤ダミー、大卒以上ダミー）場合は、貧困経験につながるパスはマイナスの符号になると予想する。

② 仮説 7-2：貧困経験がある家庭の親は、そうでない家庭の親よりも負の育児感情をもちやすい。

「相対所得仮説」の検証のため、「子ども時代の貧困経験」から「負の育児感情ダミー」に向かうパスを分析する。子ども時代の貧困経験がある家庭は、親のメンタルヘルスが不調になると考えるため、負の育児感情につながるパスの符号はプラスと予想する。

③ 仮説 7-3：親の階層が高い家庭ほど、子どもに自己指令性を求めている。

「父母の階層ダミー」から「自己指令性スコア」につながるパスを検証する。Kohn の親資源論に基づき、親が常勤あるいは大卒以上の学歴をもつ場合、自己指令性スコアは高まると考える。よって、パスの符号はプラスと予測する。

④ 仮説 7-4：負の育児感情を持つ親の養育の質は、そうでない家庭の親よりも低い。

「相対所得仮説」検証のため、「負の育児感情ダミー」から「養育の質」につながるパスを検証する。本研究では、養育の質は「朝食をとる」、「おしりをたたかない」という数字が大きくなるほど、暖かい養育態度になるスコアを利用しているため、数値がプラスになるほど、質が上昇すると考えている。よって、親が負の育児感情を持つ場合は、養育の質が低下すると考えるため、符号はマイナスと考える。

⑤ 仮説 7-5：貧困経験がある家庭は、そうでない家庭に比べ、子育て費用、家庭内文化資本に乏しく、養育の質が低い。

貧困経験から直接起因する社会的相続への影響を検証するため、「子ども時代の貧困経験」から「子育て費用」、「家庭内文化資本」、「養育の質」に伸びるパスを分析する。貧困経験がある場合は、すべての相続を制約すると考えるので、「子育て費用」、「家庭内文化資本」、「養育の質」はすべてマイナスの符号になると予想する。

⑥ 仮説 7-6：子どもに自己指令性を求める家庭は、そうでない家庭に比べ、養育の質が高い。

Kohn の親資源論を検証するため、「自己指令性スコア」から「養育の質」に伸びるパスを分析する。自己指令性を望む親ほど、あたたかい養育態度であると予想し、「養育の

質」に伸びるパスの符号は、プラスと想定する。

⑦ 仮説 7-7：子どもに自己指令性を求める家庭は、そうでない家庭に比べ、家庭内文化資本の水準が高い。

Bourdieu の家庭内文化資本を検証するため、「自己指令性スコア」から「家庭内文化資本」に伸びるパスを分析する。高い階層の親ほど家庭内文化資本を求めると考えられるため、符号はプラスになると予想する。

⑧ 仮説 7-8：養育の質が高い家庭で育った子どもの現在の健康状態は、そうでない家庭の子どもよりも、良好である。

Grossman の健康投資の考え方から、親の養育が投資されるほど、子どもの健康状態が良好になると想定する。本研究での健康状態は「病気がちかどうか」（病気がち=1）のダミー変数を用いるため、「養育の質」が、「健康状態」を損なうとして、この間のパスの符号はマイナスになると考える。

⑨ 仮説 7-9：養育の質が高い家庭で育った子どもは、そうでない家庭で育った子どもよりも、仲間関係の構築が良好で、問題行動が少ない。仲間関係が良好な子どもは、小学校の勉強との親和性が高い。

暖かい養育環境で育った場合、子どもの人的資本形成は良い影響を受けると考える。よって、「養育の質」から「仲間関係」と「問題行動」に伸びるパスは、いずれも符号はマイナスとなると想定する。社会関係資本の良好さは、人的資本によい影響を与えると想定し、「仲間関係」から「小学校の勉強との親和性」に伸びるパスは、マイナスと想定する。

⑩ 仮説 7-10：養育の質が高い家庭の子どもは、子どもの小学校の勉強との親和性が高い。

社会的相続の養育の質が、子どもの人的資本形成に良好な影響を与えると考える。よって、「養育の質」から「小学校の勉強との親和性」につながるパスの符号は、プラスと想定する。

⑪ 仮説 7-11：家庭内文化資本が高いほど、子どもの小学校の勉強との親和性が高い。

家庭内文化資本の仮説によれば、文化資本が高いほど勉強との親和性は増すことになる。よって、「家庭内文化資本」から「小学校の勉強との親和性」に伸びるパスの符号はプラスと予想する。

⑫ 仮説 7-12：子育て費用が高いほど、子どもの小学校の勉強との親和性が高い。

金銭投資をするほど、小学校の勉強スコアが上昇すると考える。よって、「子育て費用」から「小学校の勉強との親和性」に伸びるパスの符号は、プラスと予想する。

⑬ 仮説 7-13：子育て費用が高いほど、子どもの健康状態は良好である。

Grossman モデルの健康投資の考え方から、金銭投資の多い世帯ほど、子どもの健康状態は良好になると考える。よって、「子育て費用」から「健康状態」に伸びるパスの符号はマイナスと想定する。

⑭ 仮説 7-14：低体重出生児で生まれた子どもは、そうでない家庭の子どもに比べ、健康

状態が悪い。

相対所得仮説に基づく労働経済学の先行研究から、低体重出生児で生まれたことは、人的資本の構成要素である健康状態に長きにわたって、影響を及ぼすと考える。よって、「低体重出生児」から「健康状態」に伸びるパスの符号は、プラスと考える。

(3) 結果の考察

1．モデルの適合度

分析のパス図は、親の階層の指標別に、図 4 から図 7 の 4 つある。それぞれの標準化係数やモデルの適合度を整理した結果が、表 22-1 から表 22-4 のようになる。

モデルのあてはまりをしめす適合度指標をみていこう。GIF、AGIF はそれぞれ 0.99、0.985 前後で 1 に近い水準であった。RMSEA は 0.029 から 0.037 で 0.05 を下回っている。よって、モデルの適合度は、妥当だと考えた。

図３　共分散構造分析のモデル図（誤差変数は省略）

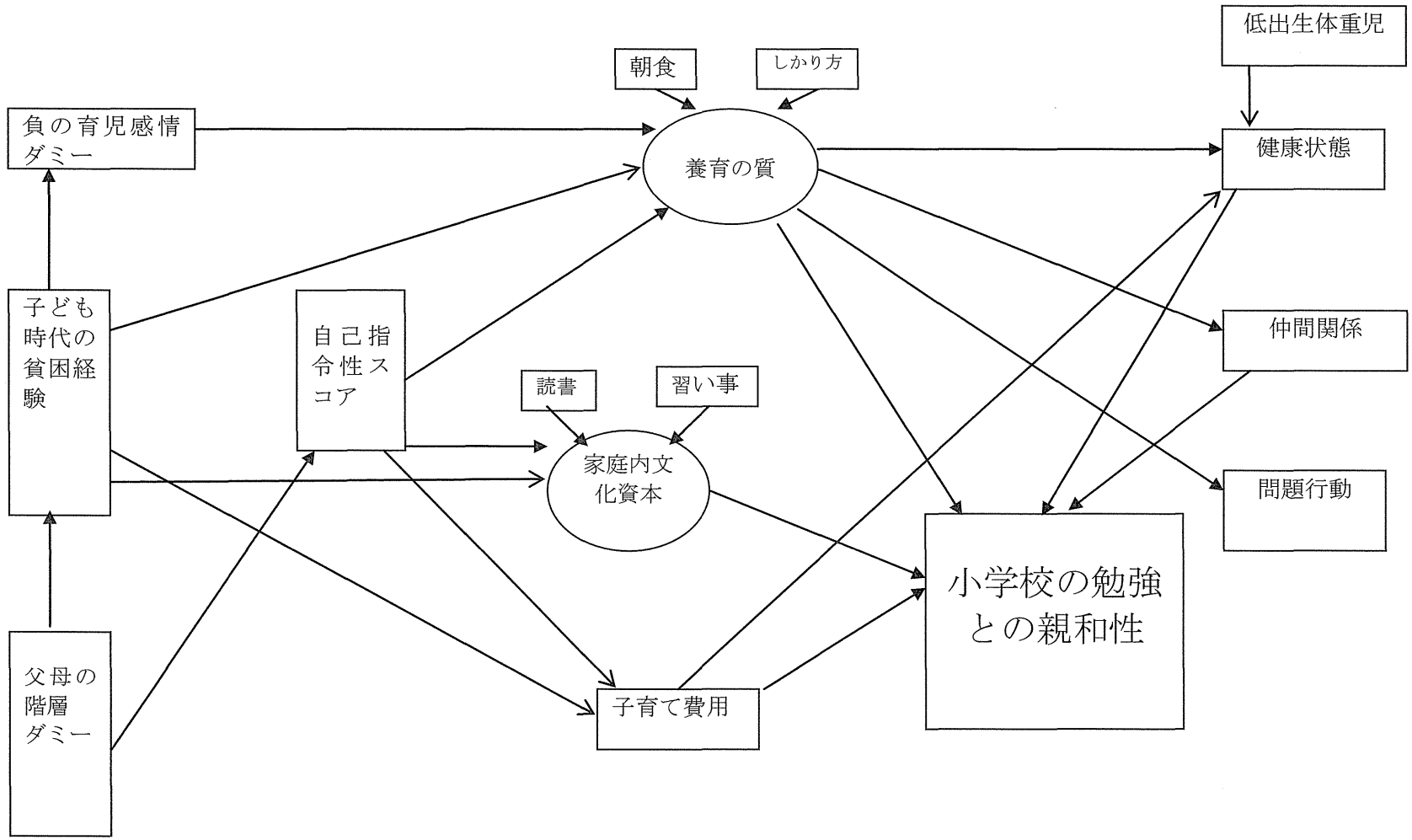


図４　標準化係数（父常勤ダミー）

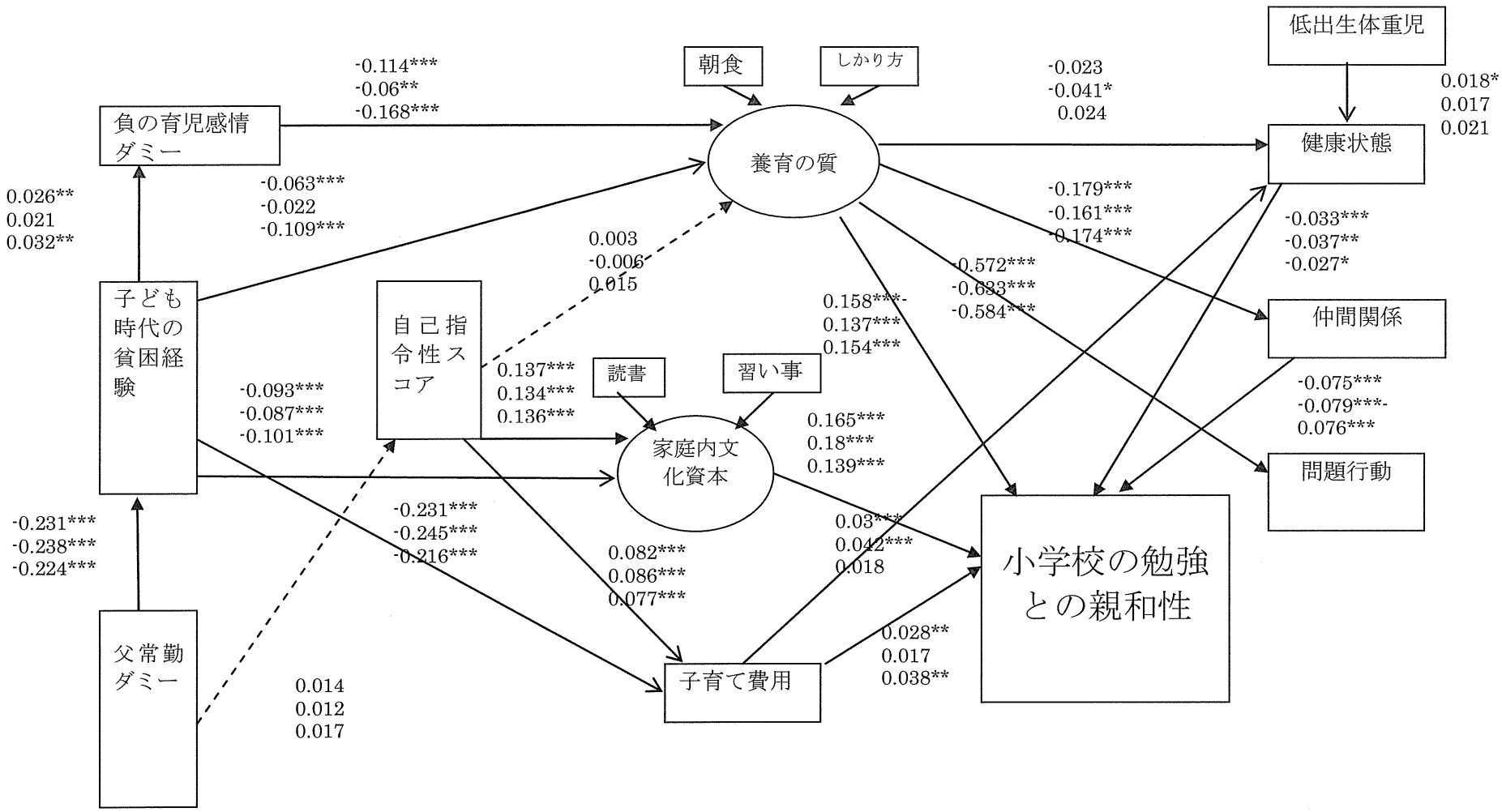


図５　標準化係数（母常勤ダミー）

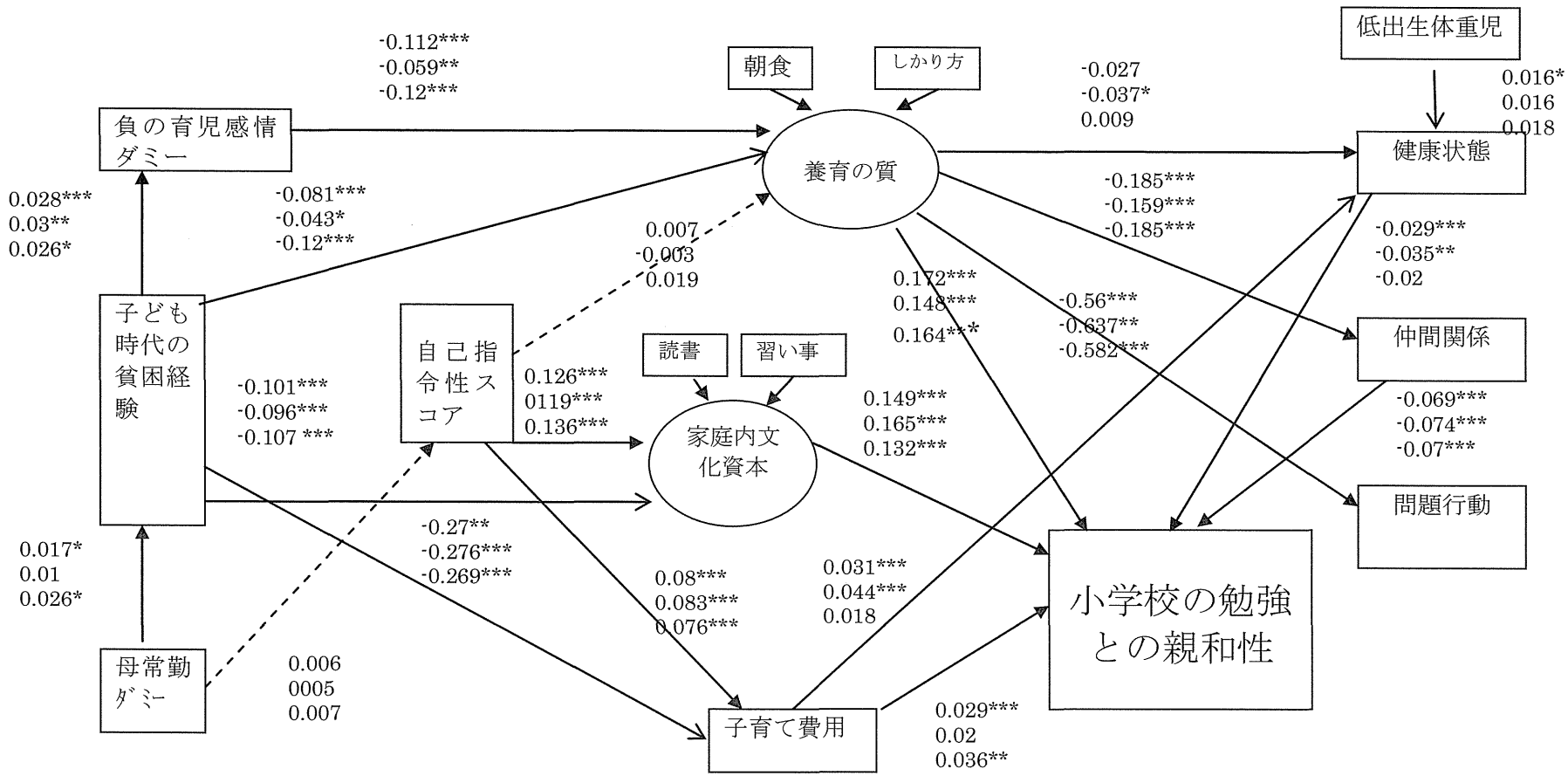


図６　標準化係数（父大卒以上ダミー）

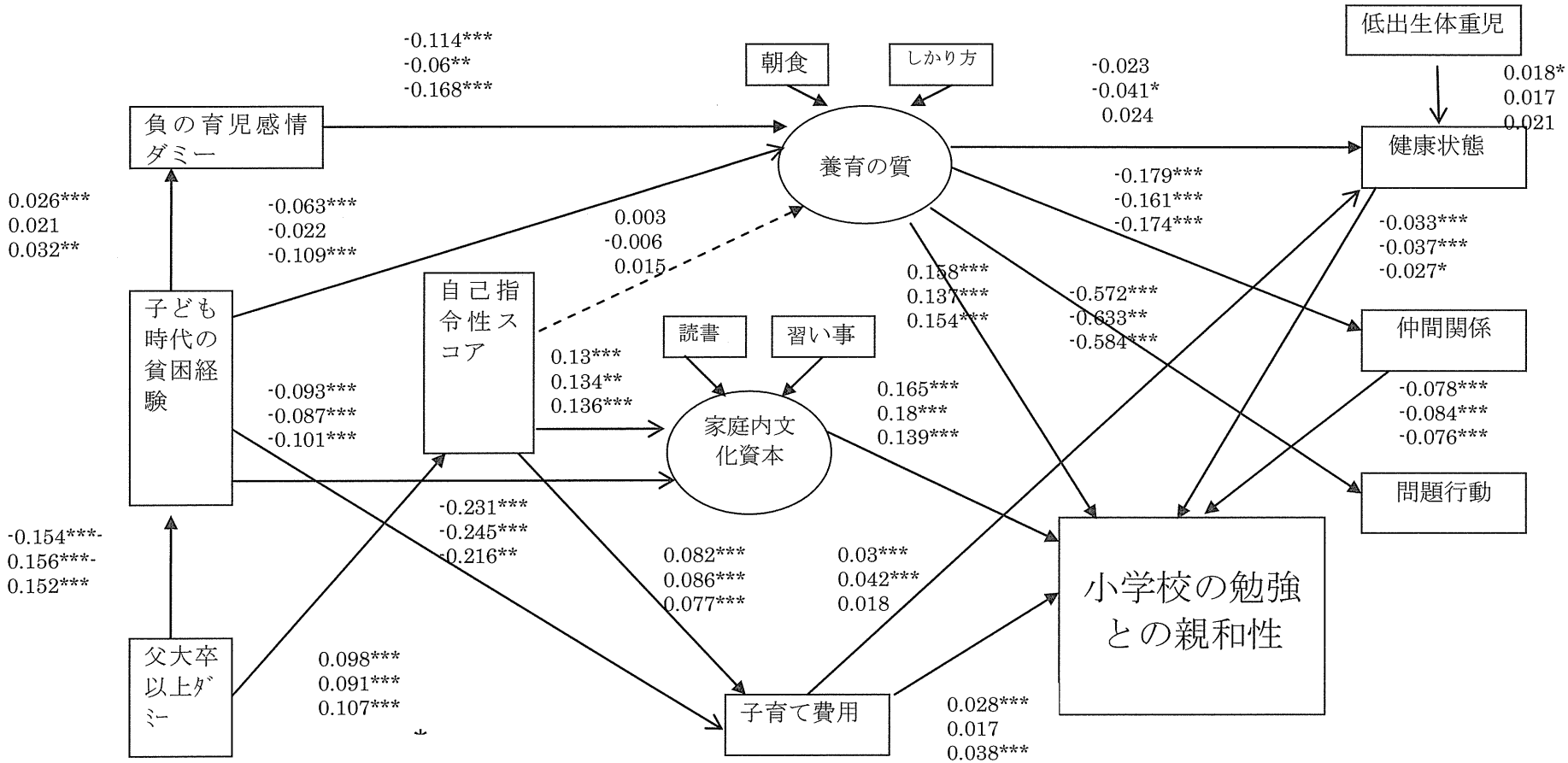
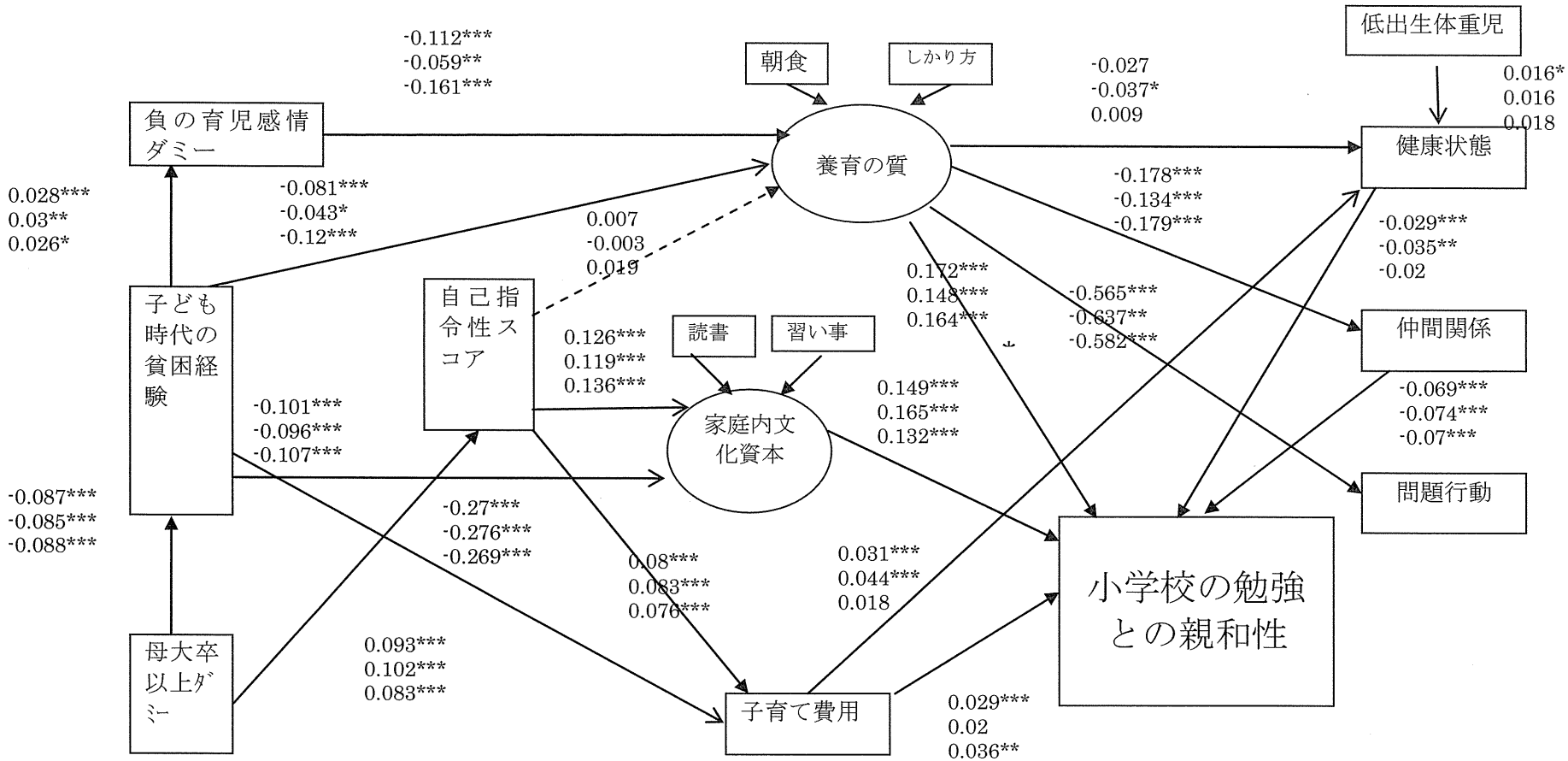


図７　標準化係数（母大卒以上ダミー）



注：図中の数値は、標準化係数をあらわす。上段：男女計、中段：男子、下段：女子
*:p<0.1、**:p<0.05、***:p<0.01

表 22-1　標準化係数一覧（父常勤ダミー）

			全体		男子のみ		女子のみ	
			標準化係数	確率	標準化係数	確率	標準化係数	確率
父常勤ダミー	-->	貧困経験	-0.231	***	-0.238	***	-0.224	***
貧困経験	-->	負の育児感情ダミー	0.026	**	0.021		0.032	**
父常勤ダミー	-->	自己指令性スコア	0.014		0.012		0.017	
貧困経験	-->	子育て費用	-0.093	***	-0.087	***	-0.101	***
負の育児感情ダミー	-->	養育の質	-0.114	***	-0.06	**	-0.168	***
貧困経験	-->	養育の質	-0.063	***	-0.022		-0.109	***
自己指令性スコア	-->	子育て費用	0.082	***	0.086	***	0.077	***
自己指令性スコア	-->	養育の質	0.003		-0.006		0.015	
養育の質	-->	健康状態	0.023		0.041	*	-0.024	
貧困経験	-->	家庭内文化資本	-0.231	***	-0.245	***	-0.216	***
子育て費用	-->	健康状態	0.03	***	0.042	***	0.018	
養育の質	-->	仲間関係	-0.179	***	-0.161	***	-0.174	***
自己指令性スコア	-->	家庭内文化資本	0.137	***	0.134	***	0.136	***
低体重出生児	-->	健康状態	0.018	*	0.017		0.021	
子育て費用	-->	小学校の勉強との親和性	0.028	**	0.017		0.038	**
健康状態	-->	小学校の勉強との親和性	-0.033	***	-0.037	**	-0.027	*
養育の質	-->	しかり方	0.232		0.183		0.249	
養育の質	-->	朝食	0.055	***	0.042	*	0.066	**
養育の質	-->	小学校の勉強との親和性	0.158	***	0.137	***	0.154	***
家庭内文化資本	-->	子読書数	0.177		0.16		0.183	
家庭内文化資本	-->	習い事	0.487	***	0.478	***	0.511	***
家庭内文化資本	-->	小学校の勉強との親和性	0.165	***	0.18	***	0.139	***
仲間関係	-->	小学校の勉強との親和性	-0.075	***	-0.079	***	-0.076	***
養育の質	-->	問題行動	-0.572	***	-0.633	***	-0.584	***
標本数			9,768		5,091		4,677	
カイ二乗			632.281		346.699		362.352	
有意確率			0.000		0.000		0.000	
GFI			0.991		0.99		0.989	
AGFI			0.986		0.985		0.983	
RMSEA			0.029		0.029		0.031	

表 22-2（母常勤ダミー）

			全体		男子のみ		女子のみ	
			標準化係数	確率	標準化係数	確率	標準化係数	確率
母常勤ダミー	-->	貧困経験	0.017	*	0.01		0.026	*
貧困経験	-->	負の育児感情ダミー	0.028	**	0.03	**	0.026	*
母常勤ダミー	-->	自己指令性スコア	0.006		0.005		0.007	
貧困経験	-->	子育て費用	-0.101	***	-0.096	***	-0.107	***
負の育児感情ダミー	-->	養育の質	-0.112	***	-0.059	**	-0.161	***
貧困経験	-->	養育の質	-0.081	***	-0.043	*	-0.12	***
自己指令性スコア	-->	子育て費用	0.08	***	0.083	***	0.076	***
自己指令性スコア	-->	養育の質	0.007		-0.003		0.019	
養育の質	-->	健康状態	0.027		0.037	*	-0.009	
貧困経験	-->	家庭内文化資本	-0.27	***	-0.276	***	-0.269	***
子育て費用	-->	健康状態	0.031	***	0.044	***	0.018	
養育の質	-->	仲間関係	-0.185	***	-0.159	***	-0.185	***
自己指令性スコア	-->	家庭内文化資本	0.126	***	0.119	***	0.136	***
低体重出生児	-->	健康状態	0.016	*	0.016		0.018	
子育て費用	-->	小学校の勉強との親和性	0.029	***	0.02		0.036	**
健康状態	-->	小学校の勉強との親和性	-0.029	***	-0.035	**	-0.02	
養育の質	-->	しかり方	0.237		0.181		0.258	
養育の質	-->	朝食	0.056	***	0.038	*	0.067	***
養育の質	-->	小学校の勉強との親和性	0.172	***	0.148	***	0.164	***
家庭内文化資本	-->	子読書数	0.153		0.141		0.163	
家庭内文化資本	-->	習い事	0.554	***	0.55	***	0.552	***
家庭内文化資本	-->	小学校の勉強との親和性	0.149	***	0.165	***	0.132	***
仲間関係	-->	小学校の勉強との親和性	-0.069	***	-0.074	***	-0.07	***
養育の質	-->	問題行動	-0.565	***	-0.637	***	-0.582	***
標本数			10,196		5,305		4,891	
カイ二乗			700.725		367.991		380.98	
有意確率			0.000		0.000		0.000	
GFI			0.99		0.99		0.989	
AGFI			0.985		0.984		0.983	
RMSEA			0.03		0.029		0.031	